

---

無線技術の日本史

---



## 第一章

「咸臨丸」で知られる木村攝津守と

その次男・木村駿吉

——文政十三年～明治十七年——

## 「咸臨丸」をひきいた 木村攝津守の生涯

### ◎「咸臨丸」の航海まで

本書の主人公は木村駿吉であるが、その性格や能力は親譲りのものだったと考えられるので、父親だった木村攝津守について、簡単に触れておこう。

木村攝津守は徳川幕府の海軍制度の近代化を図った功労者で、とくに知られるのは「咸臨丸」による太平洋横断航海である。

「咸臨丸」の最高責任者として私財をなげうって職務

を全うしたことが知られている。

以下にかいつまんでその経歴を記す。

◇文政十三年（一八三〇年／誕生）

この年の二月五日、幕臣で浜御殿奉行木村喜彦の長男として、役宅で生まれた。名は喜毅。

浜御殿は現在の浜離宮庭園で、当時は徳川家の別邸であり、多くの植物が植えられ、また鷹狩もなされた。

木村家は代々この浜御殿に関係の深い役職にあり、したがって將軍の目にとまることも多かったらしい。

生来生真面目な勉強好きで、將軍家慶に可愛がられ、十二歳で昌平校に学び、浜御殿奉行見習となった。

◇嘉永二年（一八四九年／十九歳）

十九歳になったこの年、旗本長谷川鉷五郎の次女彌重を妻に迎えた。

その後二十五歳のとき、西丸目付に抜擢され本丸勤務を命じられた。

同年、姉の久邇が没したが、久邇は桂川甫周の妻だった。桂川は將軍を診察する名医として知られており、この結婚は將軍の薦めだったらしい。

後年、桂川と久邇の娘の今泉みねが思出を語った『名ごりの夢』が出版されているが、それによると伯父にあたる木村攝津守は、小さな娘のみねに對してもしやちほこ張つて挨拶するような人だったらしい。

またみねは木村家の娘たち（従姉妹）と浜御殿の庭で遊んだと語っており、親密だったと分かる。

桂川は著名人であり多くの弟子がいたが、その中の一人が福澤諭吉であり、福澤が「咸臨丸」に乗船できたのは桂川が義弟にあたる木村攝津守に依頼し、攝津守が承知したからだと言われている。

このことから、福澤諭吉は終生攝津守に恩義を感じていた。

#### ◇安政三年（一八五六年／二十六歳）

この年の初めに本丸目付となり、暮れに長崎目付を命じられた。浜御殿役宅から築地に転居した。

翌年早々に將軍家定に拝謁し、図書と改名し、四月に長崎に到着し、そこで海軍伝習監督および医学館学問所取締を命じられた。

長崎の海軍伝習所は安政二年に設立された、科学や航海術などを学ぶ学校で、オランダ軍人を教師に依頼

していた。当面の目標として、オランダに発注した「咸臨丸」などの乗員養成があった。

ここで木村攝津守は海軍の技術を学び、安政五年には「咸臨丸」に乗って五島列島・対馬・鹿児島などへの練習航海をおこない、経験を積んだ。

安政六年になると海軍伝習所が廃止になったので江戸に戻り、芝新銭座（現在の港区浜松町で浜御殿のすぐそば）に住んだ。

そして九月に軍艦奉行並になり、十一月に米國渡航の命を受け、軍艦奉行に昇進し攝津守に叙せられた。

### ◎「咸臨丸」の航海以後

#### ◇万延元年（一八六〇年／三十歳）

この年の一月、「咸臨丸」で品川沖を出港し、横浜でブルックからアメリカの航海経験者に乗せ、十九日に浦賀を出帆、二月二十六日にサンフランシスコに到着し、歓迎された。

それから正使一行に会い、閏三月に帰途についた。

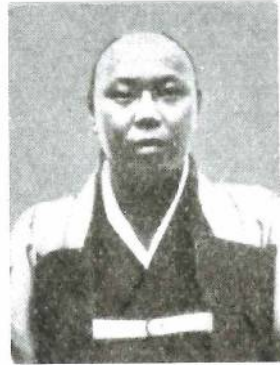


図1・1 壮年期の  
木村芥舟  
(元治元年ごろ)

途中ハワイに立ち寄り、五月に浦賀に帰着した。

世紀の大航海だったが、木村攝津守は私財を使って船内の和を守り、この大航海を成功させた。

この航海での勝海舟の振るまいに、従者として乗船した福澤諭吉は怒ったらしいが、木村攝津守は帰国後も勝と付き合っていた。

図1・1にこの時代の木村攝津守を示す。

また図1・2に「咸臨丸」を示す。

◇文久元年（一八六一年／三十一歳）

帰国後は軍政に関与し、種々の建白をした。



図1・2 木村芥舟、勝海舟、福澤諭吉ら  
を乗せて太平洋を越えた「咸臨丸」

文久元年（一八六一年）には、長男の浩吉が誕生した。幼名は浩太郎と言った。結婚して十年以上経ってからの男子誕生だが、その前に夭逝した男子がいたらしい。

文久二年には海軍の増強を建白するが入れられず、軍艦奉行を辞したが、いくつかの役職をこなした。

◇慶應元年（一八六五年／三十五歳）

世情騒然とする時代になり、長州征伐のための将軍上洛に従って京都に着きさらに大阪城に入ったが、兵庫開港問題で小笠原長行と意見が合わず罷免されて江戸に戻った。

慶應二年になると再び軍艦奉行並や軍制取調を命じられ、また京都へ赴任した。この年の九月には勝海舟とともに海軍振興策を建議した。

このような、罷免や復活の連続は、後の次男の木村駿吉の人生とよく似ている。性格の遺伝であろう。

その木村駿吉だが、この年の十月二日（一八六六年十一月八日）に生まれた。幼名を駿次郎と言った。

慶應三年になると、また江戸に戻り、「咸臨丸」と同じくオランダで造られた「開陽丸」を横浜で受け取った。

六月には灯明台建設掛を命じられ、さらに軍艦奉行に昇進した。

◇明治元年（一八六八年／三十八歳）

明治維新の年だが、江戸に戻った将軍慶喜を浜庭園に迎え軍兵撤回のための軍艦派遣を進言。江戸開城の直前に海軍所頭取、勘定奉行勝手方を命じられた。

新政府となり七月に江戸が東京と改称されると、隠居して家督を七歳だった浩吉に譲った。

住居を芝新銭座から今の府中市に移した。一種の疎開であろう。

明治四年に府中から都心の四谷坂町に移転した。生活は極貧で、折に触れて福澤が助けたいらしい。

明治七年、長男浩吉は海軍兵学校に入学。十三歳だった。兵学校資料では籍は浜松の士族となっている。家督を譲られた浩吉はそのような名目的な籍によって若干の扶持を得ていたらしい。当然ながら駿吉も浩吉の籍に入っていた。

明治政府は経験豊富な木村攝津守を登用しようとしたが、固く辞退したと言われている。

隠居した後は幕府海軍の歴史、自身の履歴など、もっぱら執筆に明け暮れた。

雅号を楷堂、芥舟といった。

勝海舟や福澤諭吉とはずっと付き合っていた。

図1・3は、明治二十二年に浩吉が英国留学した際の記念写真で、一家が写っている。

◇明治三十年（一八九七年／六十七歳）

海軍少佐に進んだ浩吉は、父のために土手三番町（現千代田区で昔武家屋敷の多かった場所）に新邸を建てて同居した。

◇明治三十四年（一九〇一年／七十一歳）

日露戦役の直前のこの年の春、維新後の木村家を助けていた福澤諭吉が没し、追悼文を書いた。

さらに同年十二月九日、木村攝津守自身も自宅で没した。満七十一歳だった。

帝国海軍創設功勞により特旨をもって正五位に叙せられた。

渋谷の瑞円寺に葬られたが、昭和になって青山墓地に改葬され、浩吉が建てた墓石が現存している。

没時、長男木村浩吉は働き盛りの四十歳で一等戦艦「敷島」の副長に任じられたばかり、次男駿吉は三十



図1・3 明治二十二年長男浩吉が英国出張時の木村家記念写真  
（後列右より駿吉、父芥舟、浩吉/  
前列右より長女稔子、次女清子、母彌重、浩吉妻千子）



五歳で海軍で無電機開発に奮闘していた。

\*

以上、駿吉の父、木村攝津守芥舟の人生を簡単に辿って見たが、非常な勉強家、優れた才能、生真面目さ、多筆家、根回し下手で誤解を受けやすい性格、潔い出处進退など、攝津守と駿吉はよく似ている。

長男の浩吉も似ているが、駿吉はもつと似ていると言えるだろう。

## 少年時代の木村駿吉

## ◎小学生になるまで

前節に記したとおり、本書の主人公である木村駿吉は、慶應二年十月二日（一八六六年十一月八日）、木村攝津守の実質次男として誕生した。

当時の木村家住居は芝新銭座だった。

駿吉の誕生については慶應三年説もあるが、木村攝津守の日記には、慶應三年の五月に初節句を祝ったとあるので、慶應二年が正しいであろう。

兄弟姉妹は、夭折を除くと、稔子・浩吉・世以子（清子）・駿吉とされている（付録11）。

木村駿吉が無電機開発に邁進していた時代に関係の深かった人達もこの前後に誕生しているので、記しておく。

木村浩吉	文久元年（一八六一年）
外波内藏吉	文久三年（一八六三年）
木村駿吉	慶應二年（一八六六年）
松代松之助	慶應三年（一八六七年）
秋山眞之	慶應四年（一八六八年）
佐伯美津留	明治四年（一八七一年）
マルコーニ	明治七年（一八七四年）
山本英輔	明治九年（一八七六年）

明治五年、駿吉六歳の時に、日本初の「学制」が布告された。それによると、小学校は下等小学校と上等小学校に分かれ、各四年制で、合計すると八年だった。ただし実働はごく僅かで、この制度による最初の小学校は明治六年開設の東京師範学校附属だったと言われている。

江戸時代からの寺子屋との区別も判然としない時代であった。

小学校にあがる前の駿吉についての記録は、初節句という以外にわからないが、可愛がられていたことと親が経済的に苦しかったことは事実であろう。

## ◎小学生のころ

木村駿吉は明治五年（六歳）ごろに小学校に入学したと言われ、その学校の二回生だとされている。

この時の木村家は現新宿区の四谷坂町に有ったが、通ったのは新宿区市ヶ谷八幡町にあった学校で現在の千代田区の番町小学校の遠い先祖にあたるが、駿吉が入った時は寺子屋で、一年か二年後に明治五年布告の「学制」による小学校になったと推定される。

したがって校舎や教師は同じであっても「学制」による正式の小学校入学は明治六年（駿吉七歳）だった可能性がある。

だとすると予備門入学の年齢が計算に合う。

木村駿吉の活字になった最初の文章は、この小学校

低学年の時代に書いた作文で、それは小学広瀬学校が出した『學庭拾芳録』という文集に掲載されている。興味深いので全文（図1・4）を記しておこう。

追日薄暑相催候處益御多祥奉賀候陳者私庶弟已六歳二相成候處終日兩親ノ膝下ニ光陰ヲ費シ候間明日ヨリ其校へ入學御依頼申度何卒巖敷御教諭奉願候不備

東京府士族木村浩吉弟

下等三級生徒

木村駿吉

九年七ヶ月

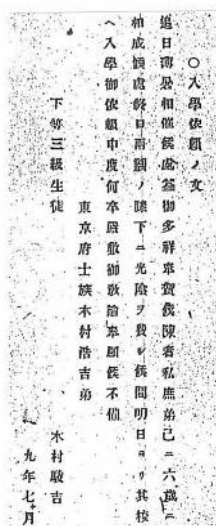


図1・4 拾芳録に投稿した駿吉の作文  
(明治十年印刷、投稿は九歳)

この文集が出たのは明治十年だが前年に書いたとすれば年齢は合う。

この文集には浩吉の妹で駿吉の四歳上の姉に当たる木村世以子の作文も載っているが、はるかに大人びている。

明治十二年になると「教育令」が布告され小学校は六歳から十四歳の八年間で、事情により短縮してもよみが四年以下は不可とされ、さらに翌年改訂があつて最低三年とされた。駿吉は小学校に正式入学してから八年間学び、新しい「教育令」によつて明治十四年（満十四歳）に卒業したと推定される。

卒業の月は七月であらうが一月説もあり明確ではない。

小学校を卒業すると、後の一高である東京大学予備門に入学した。

この時代、東京大学は日本で唯一の近代的大学だった。

## 東大予備門に入学・退学・復学

## ◎予備門入学のころ

小学校から東京大学予備門にかけての木村駿吉の履歴には不明な点が多い。年度は大体は分かるが、月日の記録は乏しい。

むろんこれには事情がある。

駿吉の小学校時代は寺子屋から近代的教育制度への過渡期であり、制度はできても実態が伴わなかったり、毎年のように改訂されたり、中途入学が許されたりしており、判断が難しいのである。

またさらに、木村駿吉自身の性格もある。駿吉は科学技術については厳密だったが、履歴書などに記す年

月日は大ざっぱであり、明らかな間違いも見つかる。したがって直筆記録だから信用できるとは限らないのである。

以下には推理が混ざっていることをご理解頂きたい。

駿吉が東京大学の教養課程に相当する予備門の試験を受けて入学したのが明治十四年であることははっきりしている。

旧一高の書類や後に一高に提出した履歴書には一月入学と記されているようである。試験日は一月十日と十一日だったとされる。

晩年になって駿吉は「学士会月報」に『五十年前の懐舊』という一文を寄せて、往事を偲んでいる。

それによると、明治十四年数え十六歳の時に、姉のお古の絞りの浴衣を着て袴をはいて試験を受けたそうである。木村家の困窮ぶりが分かる。

試験は英語・漢文・数学の三科目で、参考書はロビンソンの算術と日本外史とスインソンの万国史だった。入学の時「貧窮願」という書類を出すと言料は免除され、教科書や学用品は貸与または支給された。

生活面でも勉学面でも、何から何まで国が面倒をみてくれたので、家は極貧であつても経済的な心配はせずに勉学することができた。

予備門の教科書はすべてアメリカからの輸入で、授業は英語だった。日本語の教科書は論語と孟子くらいだった。

寄宿舎に入るとストーブ用の薪を余して菓子代に換えるなどした。

大学卒業式に招かれた福澤諭吉が、学生の優遇ぶりに皮肉を言ったので、それから支給が少し減つたらしい。

大学を卒業すると就職難皆無の引く手あまたで、将来の心配などまったく無かつた。

明治初期の若いエリートの子供たちの青春が分かつて興味深い。

(過渡期に学んだため駿吉は後に一般的となる日本語表記には弱かつたらしい。五十音図は習つておらず、力行サ行などは知らなかつたと述べている。たしかに駿吉の文章には過渡期的な所がある)

木村 駿吉	小出 鑣太郎	渡邊 董之助	高橋 壯三郎	川崎 新三郎	關口 寛一郎	石橋 朔	木下 新三郎	町田 忠治	上村 行一	横田 四郎	岩田 鍊	渡邊 勇太郎	大森 太吉	木村 駿吉	渡邊 董之助	山田 恒夫	平尾 鉄三郎	高野 禮太郎	坂本 馬爾	第三級四ノ組
東京	東京	岐阜	東京	東京	東京	東京	長崎	秋田	鹿児島	大分	東京	大分	滋賀	東京	岐阜	福岡	石川	長野	高知	

図1・5 豫備門クラス名簿の木村駿吉名  
(右明治十四十五年/左明治十五十六年)

このような生活を送っていた予備門時代の木村駿吉の名は、予備門の名簿の「明治十四〜十五年」と「明治十五〜十六年」に見える。

予備門の制度は駿吉が入学した年の九月に変更になり、四年制が三年制になったので、すでに在籍していた明治十四年に二年になる筈の生徒達が新しい一年となった。

したがって駿吉のクラスには、入ったばかりの駿吉たちと、一年前から入っていた生徒とが一緒にいたらしい。

図1・5に、「明治十五〜十六年」名簿の駿吉の名のある個所を掲載した。

さて、この予備門名簿を検討すると、その次ぎの「明治十六〜」の名簿には木村駿吉の名は見つからない。

驚いたことに、退学になっていたのである。

## ◎予備門退学と復学

駿吉が予備門に入って三年目に、東京大学史において「明治十六年事件」と呼ばれている事件が起こり、駿吉は最初の挫折を味わった。

騒動の当事者として、退学処分を受けたのである。その経緯は次ぎのとおりであった。

東京大学の学位授与式は通例としては夕方から夜にかけて催され、下級生は窓から卒業生が呉れる料理を受け取って運動場で宴会をして楽しむという風習があった。

しかし明治十六年十月二十七日の学位授与式は昼間なされたので、下級生は楽しみが無くなってしまった。

また予備門生は数人しか出席が許されなかった。

これらに対する不満の他に、取締強化への不満も重なって、寄宿舎にいる大学生や予備門生の大部分が式典をボイコットし、夕方から夜にかけて大暴れして大学の施設を壊してしまった。

これは大問題であり、総長（当時は綜理と呼ばれた）だった加藤弘之（日本初の文学博士でのちに法博も）

は——たぶん政府要人も相談したであろうが——騒動を起こした全員を十一月二日付で退学処分にし、退学学生が官公私立諸学校に再入学することも禁じた。さらに就職についても厳しく制限した。

決然たる措置であった。

処分された人数は、新聞によれば大学生が八一名、予備門生が六六名、合計一四七名となっている。東大史によれば十一月二日付が計一四五名で、後に一名追加されて合計一四六名とされている。

この中には後の有名人がかなりいた。

さて、木村駿吉は当時寄宿舎にいたらしく、この退学処分を受けた一人だった。どの程度暴れたのかは不明だが、もともと血の気の多い人物だから、相当な器物破損をしたのではないかと想像される。

この事件を報じた新聞記事の予備門生の部分を図1・6に示した。最初の方に木村駿吉の名が見える。

このあと、加藤弘之らは相当苦慮したのであるが、結局は、悔悟せよと説得して、次の温情措置がとられた。

東京大学豫備門本費退学生

東京大屋八十八郎、岡山平田謙術、宮城能勢陳安、長野小松鎌次郎、三重岡崎源之助、愛知左右田新三郎、新潟高倉作太郎、大坂有賀長文、東京木村駿吉、島根志立鐵次郎、愛知柳富五郎、岡山瀧貞吉、福岡稻次亥三郎、愛知加藤禮次郎、熊本喜悅博矩、大坂澤邊昌盛、廣島西尾虎太郎、宮崎齊藤重高、新潟廣川新太郎、長崎西澤正太郎、福岡三池貞一郎、福島遠藤剛太郎、兵庫三上孝次、佐賀神崎東藏、茨城朝比奈京助、秋田山口祐之助、新潟佐藤虎之助、三重高槻純之助、岐阜常松英吉、秋田中田錦吉、廣島橋高裕吉、鳥取田中静治、大分津田俊耶、愛知城野春太郎、大坂松岡萬次郎、大分加納哲次郎、愛知廣瀬吉郎、岐阜渡邊重之助、埼玉杉清吉太郎、東京瀧澤清介、山口中井孝太郎、鳥取竹内熊二、滋賀石黒誠太郎、山口戸倉馬三、鳥取藤田虎力、鹿児島松方孝次郎、岐阜渡邊千代三郎、石川朝山元吉、福岡黒岩倉太郎、鹿児島是枝軍六、新潟田中勇四郎、福岡野田十代治、埼玉山口義隆、廣島岸本雄之進、兵庫奥平萬五郎、兵庫服部漸、鹿児島吉井友兄、長崎原絶太郎、高知木村楠樹太、福井柳祐久、東京松田信光、宮城本多莊次郎、愛媛野田藤馬、島根山根銀之助、山口柴田家門、群馬佐野友三郎

図1・6 豫備門退学の新聞記事  
(朝野新聞明治十六年十一月二十五日)

明治十七年一月十二日…軽罪六〇名の再入学許可。

明治十七年三月 六日…一九名の再入学許可。

明治十七年五月十七日…暴力行為が顕著だった六七名も悔悟したため再入学を許可。



木村駿吉はかなり強情を通したが、結局は悔悟して最後の六七名の中に入った。

おそらく父親や兄が強く説得したのであろう。

学生たちはすべて勉強家で愛国心旺盛だったが、国民の税金で勉強させてもらっている——という認識は薄かったらしい。

税金といっても江戸時代の年貢の延長のような時代なので、無理からぬ点もある。

復学したすぐあとの明治十七年七月十日付で、駿吉は無事予備門を卒業した。十七歳八ヶ月だった。

(明治十八年卒業説もあるが、それだと理学部資料と合わない)

